

CONTENTS

地域会だより	1
連載【隔月 全6回】「環境建築」その先へ 第5回 -Building a Good Cycle-	2
川島 範久	
第39回JIA 東海支部設計競技 2次審査結果 超空想住宅へ	4
・結果と審査員紹介	4
・審査経過 間瀬 高歩	4
・審査総評 橋本 雅好	5
・金賞「風景を採取する自転車建築」中山 英之	6
・金賞受賞者の声 門田 健嗣	7
・銀賞「世界にリンクをさだめたけもの」橋本 雅好	8
・銀賞「海の巣」亀井 暁子	8
・銅賞「にんげんだもの 無駄の多い家」山口 千乃	9
・銅賞「名前のない空間で」山岸 綾	9
・銅賞「家は空の青さを知り、やがて地球の青さを知る」吉元 学	10
・中山英之ゲスト審査員特別賞「ナノの箱家」中山 英之	10
・奨励賞「いきものぐらし」	11
・審査を終えて 中山 英之	12
・中山英之氏 記念講演会 高瀬 元秀	12
静岡発 アメリカ広葉樹建築家懇談会in静岡	13
清 峰芳	
三重発 三重短期大学出前授業	14
相原 宏康	
三重建築学生合同課題発表会2023	14
山本 覚康	
2024年度 役員選挙報告 東海支部・愛知地域会	15
保存情報 第265回 データ発掘：豊田市阿蔵町集落と置き屋根 土蔵	16
鈴木 祥司	
編集後記	16
伊藤 彰彦・服部 昌也	
第55回 中部建築賞の入賞・入選・特別賞作品決定	17

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部

・2/22 第8回支部役員会

■JIA静岡地域会

・2/ 8 静岡地域会役員会の開催(WEB同時開催)

■JIA愛知地域会

・2/15 住研セミナー

『恒久住宅の実現を目指して ～最新の住宅建材の動向～』

・3/1 第9回役員会

■JIA岐阜地域会

・2/2 2023年度 JIAの窓3「各務原市庁舎」建物見学会

時間：15:00～16:50（開場14:30）

場所：各務原市庁舎

※（受付場所）4階402会議室（各務原市那加桜町1丁目69番地）

参加費：無料（先着申込30名）

・2/20 第10回役員会 18:30～20:30

■JIA三重地域会

・2/16 第7回役員会、第6回例会 ZOOMにて

表紙 常滑の景色……①「屋根のある風景」

写真は、大野町海岸の堤防から見る屋根。

土管が作られていた最盛期には瓦屋根の間から煙突が立ちあがり、黒々とした煙が漂っていた。

その当時は燻し瓦でモノクロームな世界。写真家、山田修二氏の「日本村」で当時の景色を思い起こすことができる。屋根の連なりは、常滑の風景の一つ。



浅井 裕雄 (JIA愛知)
裕建築計画

Building a Good Cycle

はじめに

本稿で紹介するGOOD CYCLE BUILDING 001 浅沼組名古屋支店改修PJ (2021)は、総合建設会社である浅沼組が推進する「人間にも地球にもよい循環」をつくり上げる『GOOD CYCLE BUILDING』の第一弾・フラッグシップとして、浅沼組の自社ビルである築30年を経過した名古屋支店を環境配慮型リニューアルしたプロジェクトであり、中規模ビルリニューアルの新たな方向性を示すものである。

中規模ビルリニューアルの可能性

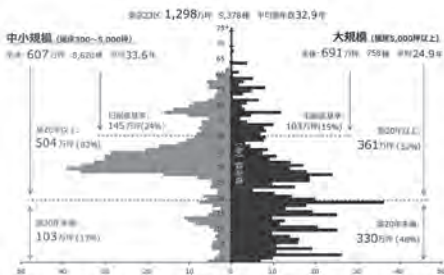


図1: 東京23区オフィスビルストック2023 (賃貸面積ベース)
(出典: ザイマックス不動産総合研究所RESEARCH REPORT, 2023.01.18)

このグラフ(図1)は、東京23区のオフィスビルを大規模と中小規模に分け、築年ごとのストック量(賃貸面積ベース)を比較したものだ。これを見ると、中小規模ビルは、バブル期に大量に供給されたため、平均年齢(築年数)が約34年と高く、築浅のストックは少ない。一方、大規模ビルはバブル期後もコンスタントに建設され続け、築浅のストックも充実している。しかし、日本の企業の99%は中小企業であり、就業者数の約70%は中小企業で働いている。つまり、中小規模ビルへの需要は高いものの、現代のニーズに合わない築古の物件が多いのである。そこで、中規模ビルながら現代のニーズに合わせた、「中規模ハイグレードオフィスビル」の需要が高まってきており、近年、

不動産デベロッパー各社が新ブランドを打ち立て、商品性を競い合うといった動きも生まれつつある。

しかし、ここで注目すべきは、「築30年前後の中規模ビルのストックは多い」という事実だ。これらは、1981年以降の「新耐震基準」に適合しているため、基本的には耐震性能上の問題がない。一方、省エネ性能については、現行基準に適合するには外皮や設備の性能向上が求められるが、中規模であるが故に執務室の奥行きが浅く、自然通風や日光利用がしやすいといった環境的メリットもある。新築でつくらなくても、多く存在する中規模サイズの既存ストックを適切に改修すれば、自然の光や風を十分に活かすことのできるビルを実現することが可能なのである。そして、躯体に係るCO2排出量を新築と比べて大幅に削減することもできる。

浅沼組名古屋支店リニューアルPJ

さて、浅沼組名古屋支店(1991年竣工の自社ビル)のリニューアル(図2)では、既存躯体・空間を活用し、自然の光・風に対するアクセシビリティを高める改変を

行い、新たに加える材料は可能な限り土や木などの自然素材とし、その自然素材の施工とメンテナンスに建物ユーザーが関わられるような取り組みを行った。

執務室階では、既存窓面のセットバックとベランダ空間の創出、窓の開閉形式の変更、庇の追加、倉庫やコアのプランニングにより、全ての執務エリアで十分な日光と通風を得ることができ、適切な日射制御を可能にした(図3)。1・2階では東西方向にスラブを除去して吹抜を設け、奥にトップライトを持つ階段室を増設し、周囲を建物に囲まれた暗い環境下でも開放的で明るいエントランス・ラウンジを実現した。周囲が開けた7・8階では南側中央のスラブを除去し、天空からの光を存分に楽しめる会議室・ホールとした。

建物内外の床・壁・天井と家具では、様々な土の活用を試行した(図4)。原料には浅沼組の他の愛知県内の現場から出た建設残土を使用した。ガラが含まれ除去に手間がかかるため通常は使い物にならないとされる土を、ふるいにかけて工程からユーザーが関わり活用可能



図2: 浅沼組名古屋支店 改修前(左)と改修後(右) (写真: 鈴木淳平)



図3:既存窓面のセットバックで生まれたベランダ空間(写真:鈴木淳平)



図4:エントランス空間における土の活用(床・壁)(写真:鈴木淳平)

な資源とし、土を塗る工程にもユーザーが関わることで、仕組みを知るとともに愛着を持ち、メンテナンスも自で行えるようにした。また、指でスジをつける、土を投げつけるなど、多くの素人が参加してこそ可能な仕上げ方法とした。なお、土壁の材料には不純物を加えることをせず(近年は耐久性向上のため石油由来の材料が添加されることが多い)、将来に塗り直す際の材料として活用でき、いずれ土に還すことができるようにした。

浅沼組と古くから縁があり、持続可能な管理をしている奈良・吉野の森からの杉も、建物の内外装や建具・家具に使用した。吉野杉丸太による正面ファサードでは、一本の杉から取れる可能な限り大きな径の丸太を、上層にいくほど径が小さくなるように、未乾燥な状態で、取り外し可能に取り付けた。これは、木を自然に立っているのと近い姿で感じることができるようにするとともに、発生する端材を最小限に抑え、乾燥後の将来的な転用可能性を最大化することを意図している。それでも発生する端材は、それら

を集積させて家具にしたり、杉の香りを楽しめるプロダクトに活用した(クラウドファンディングを実施し実現)。

また、既存建物で使用されていた石材などは、きれいに取り外すことができたものは内装の面材として再利用し、その他は家具の材料に転用した。また、プラスチックごみを砕いたものを熱して制作した面材と既存家具を組み合わせたり、再生プラスチックの糸からつくられたニットで既存家具を包んだり、テキスタイルを制作してカーテンに使用するなど、都市で発生するゴミを活用する試みも行った。

以上のような既存躯体活用と自然素材利用により、新築と比べ、躯体と仕上げに係る製造・建設時のCO2排出量を約85%削減した(図5)。外壁や躯体の補修により耐久性向上・長寿命化も行った。また、外皮性能の向上と高効率設備の導入などの省エネ改修により、運用時のCO2排出量を旧社屋の50%以下に削減するZEB readyを達成した。昼光利用や自然通風を十分にできるパッシブ改修

に加え、土・木・植物といった自然物に囲まれる環境とすることで、建物居住者が快適・健康でいられる空間とし、米国の健康建築性能評価制度「WELL Building Standard TM (WELL認証)」でゴールドを取得した(築30年以上のオフィスビル全体の改修でのWELL認証のゴールド取得は日本初)。

以上のように、ストックの多い築30年前後の中規模ビルをリニューアルすることで、近年需要が高まる「中規模ハイグレードオフィスビル」を、環境的・経済的な負荷を大幅に低減しながら実現することができた。この事実は、この新しい方法論に普及力が十分にあることを示していると言えるだろう。何より重要なのは、ごくありふれた近代的なオフィスビルを、太陽光や自然風、土や木、そして植物などの「自然」に溢れたデライトフルな建築に生まれ変わらせることができることを示したことだろう。変化する「自然」と共にあることに私たちは喜び(Delight)を感じる。そして、そのような変化する「自然」に対して、窓やカーテンの開け閉め、木や土の定期的な手入れといった形で、ユーザーは主体的に関わり続けることができ、建物への愛着が増すとともに、自身でメンテナンスすることもできる。これらは先に述べた数値的な脱炭素の効用以上に、本当の意味での持続可能性に寄与するものだろう。

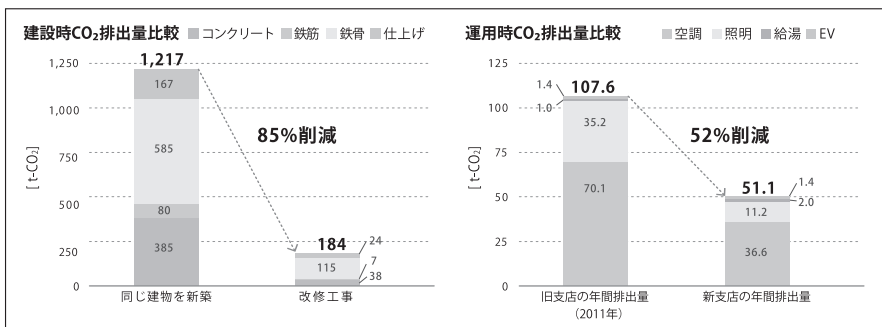


図5:CO2排出の削減量の試算

川島 範久 KAWASHIMA Norihisa

建築家。川島範久建築設計事務所代表取締役。明治大学理工学部建築学科准教授。1982年生まれ。2005年東京大学卒業。2007年東京大学大学院修士課程修了後、日建設計勤務(-2014年)。2012年、UCパークレー客員研究員。2016年東京大学大学院博士課程修了、博士(工学)取得。2017年川島範久建築設計事務所設立。

明治大学 准教授
川島範久建築設計事務所 代表取締役

建築家 川島 範久



超空想住宅へ

■日時：2023年12月2日(土) 12:00～18:00 ■会場：TOTOプレザールーム1・2(TOTOテクニカルセンター内)

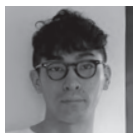
○【金賞】	「風景を採取する自転車建築」	門田 健嗣 (情報科学芸術大学院大学)
●【銀賞】	「世界にリンクをさだめたけもの」	安田 壮馬 (福井大学大学院安全社会基盤工学)
●【銀賞】	「海の巣」	紀平 陸 (慶應義塾大学環境情報学部)
●【銅賞】	「にんげんだもの 一無駄の多い家」	神谷 尚輝 (名城大学大学院理工学研究科建築学専攻)
●【銅賞】	「名前のない空間で」	向井 航希・加藤 哲也 (名城大学理工学部建築学科)
●【銅賞】	「家は空の青さを知り、やがて地球の青さを知る」	横井 悠介 (名城大学大学院理工学研究科建築学専攻)
【中山英之ゲスト審査員特別賞】	「ナノの箱家」	杉山 莞太 (静岡県立科学技術高等学校)
【奨励賞】	「いきものぐらし」	山本 雄理 (金沢工業大学大学院) 安井 千尋 (金沢工業大学)

■審査員(順不同・敬称略) ◎:審査員長 ○:ゲスト審査員



◎ 梶本 雅好

梶山学園大学准教授



◎中山 英之

東京藝術大学准教授
中山英之建築設計事務所



亀井 暁子

静岡文化芸術大学教授/JIA会員



山岸 綾

中部大学准教授
サイクル・アーキテクト



山口 千乃

CEN ARCHI



吉元 学

愛知淑徳大学教授
ワークキューブ/JIA会員

■審査経過

2023年度の第39回設計競技2次公開審査・表彰式・記念講演会は、12月2日TOTOプレゼンテーションルームに於いて開催しました。今回の設計競技のテーマは、梶本雅好審査員長より『超空想住宅へ』として出題され、全国各地から33作品の多様な応募があり、10月21日の1次審査において6作品が2次公開審査対象として選定されました。

2次公開審査では、1次審査で選定された6作品の入賞者が1組ごとに5分間のプレゼンテーション、審査員から10分間のヒアリングをふまえて、公開審査・投票を1時間掛けて行いました。2次公開審査では、作品1点1点について振り返りながら入賞者と審査員とのディスカッションを行うこととし、議論を重ねながら作品を講評していく公開性を持たせた審査は、設計競技委員会が重視している審査方法です。

審査結果は、審査員が5点満点で各作品の評価付けを行い、最多得点を獲得した『風景を採取する自転車建築』が金賞に決定しました。そのほかの作品は銀賞2点、銅賞3点、中山英之ゲスト審査員特別賞1点、奨励賞1点、上記の方々の審査結果となりました。

2020年初頭からのコロナ禍に伴い、設計競技の中止やオンライン審査による開催年度があったものの、今年度は、会場での対面審査によって審査員から入賞者へのヒアリングがなされ、審査員と入賞者との懇親を深めることができました。

東海支部が主催する設計競技は、支部事業では最も歴史ある事業として1984年に第1回が開催され、2024年には40回を迎えます。設計競技委員会では、これまでの設計競技の歴史や活動を継承し、今後も住まう空間の多様性や建築の可能性を共に考える場を意識しながら展開していきたいと考えています。

末尾ながら、設計競技開催に際して会場をご提供いただきました企業様、ご協賛いただきました企業の皆様、会員の皆様には、多大なるご支援を賜り厚く御礼を申し上げます。

間瀬 高歩 (JIA愛知)

地域計画建築研究所・設計競技特別委員会委員長



審査総評

こんなに楽しく、得るものがたくさんあった機会に感謝しかないです。

2023年4月初めに、南川祐輝さんから、第39回JIA東海支部設計競技の審査委員長の打診をいただき、その後のJIA東海支部設計競技特別委員会でのテーマ案に対する議論、1次審査での審査員の評価軸の多様さ、2次公開審査会でのファイナリストの学生との質疑応答、ゲスト審査員の中山英之さんの講演会まで、すべてが夢のようなひとときでした。

JIA東海支部設計競技といえば、学生と一緒に一風変わったテーマに対して、様々な提案を模索する側でしたが、その時間はとても有意義で、特に、第31回JIA東海支部設計競技「特定秘密保護住宅」の応募案は、今でも大学研究室の扉に貼ってあります(写真)。そして、2021年には、第37回JIA東海支部設計競技「血のつながらない家族の家」にて、審査員長の武藤隆さんからお声がけで審査員をさせていただき、そこでの講評の視点が今回の審査委員長へとつながったとのことで、気合い満々で挑ませていただきました。

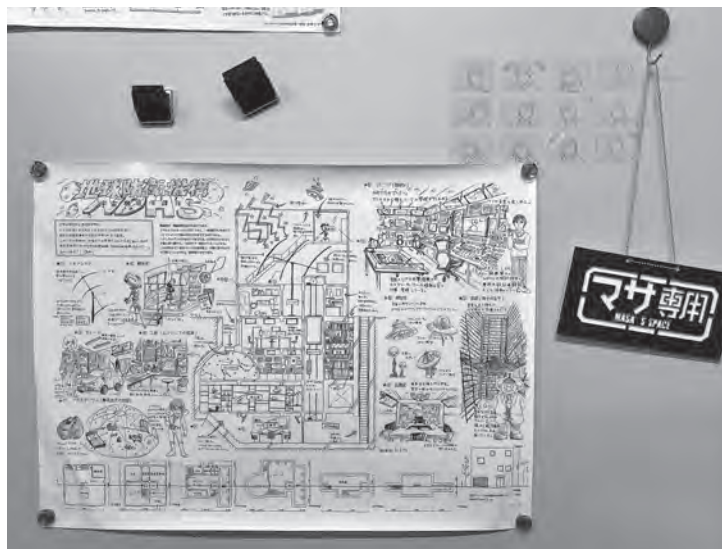
審査委員長としての最初の仕事は、テーマ設定です。これまでのテーマを何度も読み返し、入賞した提案を読み解き、また、現代社会の波の中で、住宅設計がどのような立ち位置にあるのかを考え続けた上で、「超空想住宅へ」というテーマを掲げました。BIMやデジファブ、画像生成AI、ChatGPTといった技術の進歩によって新たに生成される住宅と、多くの設計者が思考を巡らせ、手を動かし続けたことで建ち現れてきた住宅との違いはどこにあるのだろうか。今、知りたいことNo.1ということで、提案しました。

次は、このテーマで審査員を引き受けていただける方々を推薦する仕事ですが、このテーマで講評を引き受けていただく建築家は誰だろうと考えた中で、すぐに中山

英之さんが思い浮かび、運よく過去のゲスト審査員もされていなかったことで、打診することになりました。引き受けていただけるかどうか、ヒヤヒヤものでしたが、快諾いただきホッとしました。中山さんの評価軸は思っていた通りキレキレで、さすがの一言でした。その上、2次公開審査会後の中山さんの講演会は、こ

のテーマに関連する構成で話していただき、まさにフルコースのようでした。また、掴みどころのないテーマでもあるので、審査員の世代・性別・専門も多様にしたいということもお願いして、このようなコンペの審査員の構成ではあまり見られない男女比=3:3という形式にできたこともよかったですかなと思っています。

課題文の中で、「さて、皆さん、住宅はどこへ向かうと思いますか。」という問いかけを入れたのは、設計競技と名乗ってはいるけど、審査員と応募者による「今後の住宅設計大討論会」としたかったためです。もくろみ通り、提案の傾向は、建築界外のテクノロジーやデジファブ技術を駆使した提案、住宅のあり方の解釈で世界観を表現した案、空間をどう認識できるか・活用できるかといった人間力が試される案、地球に留まらず宇宙へ向かう案、原初的な暮らし方へ回帰する案、他にも多岐に渡る視点での「超空想住宅」が集い、1次審査、2次公開審査会を通して、住宅とは何か、建築とは何かに対する多くのキーワードが続出し、1次審査では、各審査員が6提案を選定した中で、満票はなく、16提案に票が割れ、2次公開審査会でも一推し案の金賞投票が割れ、大接戦となりました。個々の提案については、個評にお任せするとして、最終的には評



価のポイントは、住宅・建築を構築することに向かい合う思いや熱意のような部分が大きかったかなと思います。

本来、審査総評とは、このような感じのテキストではないと思いますが、一味違ったJIA東海支部設計競技への愛が止まらず(笑)、思いや気持ちを伝えずにはいられてませんでした。

第39回JIA東海支部設計競技「超空想住宅へ」にチャレンジしていただいた応募者の皆様、このような難題にも関わらず、審査員を引き受けていただいた皆様、橋本のゴリ押しのテーマで実施することを快諾いただいたJIA東海支部設計競技特別委員会の皆様、及び、実施・運営にご協力いただいた皆様、すべての方々に感謝致します。

第40回に向けて「JIA東海支部設計競技」が新たな展開になっていくと聞いています。今後は、学生たちとチャレンジする側に戻って、追っかけ続けたいと思っています。そして、どなたでも応募できるコンペですので、皆さん、ぜひチャレンジを!

橋本 雅好

橋山女学園大学准教授

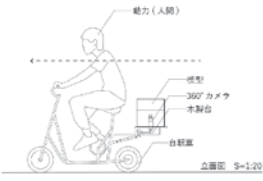


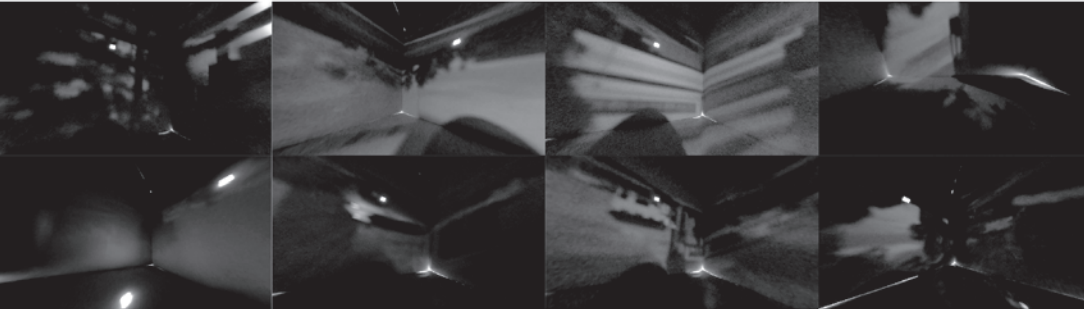
⇒ 金賞 ⇐ Gold prize

「風景を採取する自転車建築」 門田 健嗣 (情報科学芸術大学院大学)

風景を採取する自転車建築 もし建築が動いたら、どのような空間体験が可能か？




本作は建築と自転車を組み合わせた表現を通じて建築の静的なイメージを覆し、建築と移動が持つ新たな可能性に焦点をあてた。道を運びながら自転車で走行する行為によって、模型内の空間はデザインされ、時間軸をもつ空間作品が生み出される。





自転車で走ること＝空間のデザイン


カメラオブスキュラによる光の像を記録した映像を空間として体験する建築の提案である。自転車の荷台に 360°カメラを内蔵した模型を設置し、自転車が走行する街並みが模型内に光の像となって映し出される。記録した映像は HMD(ヘッドマウントディスプレイ)を介して空間として体験する。


+

=


自転車で行く 風景を記録 HMDで空間体験


従来の建築との違い

敷地



敷地

外と内の関係



人間も外環境の一部に(非人間中心的空間)

走ることで周辺環境が変化し続ける

建築のコンペにメディアアート作品が現れて、金賞を奪い去る。今年起こったドラマは、けれども決してイレギュラーな事件などではない。そう思わせるにふさわしい、極めてフィジカルで、都市的で、そして私たちの記憶にエモーショナルに働きかける、つまり優れた建築のそれが凝縮したようなこの作品に、審査員全員の評価が集まる結果となりました。

この提案は、小さな穴を穿った箱の中に市販の全天球カメラを密閉することで、ピンホールカメラの原理で内壁に投影された世界を、ゴーグル型VRディスプレイで再生する、という極めてシンプルなものです。外部が投影された内部、というカメラオブスキュラにそもそも備わる反転性に、誰も入ることのできない部屋のインテリアを経験する、というもうひとつの転倒が重ね合わされたとき、わたしたちにとっての世界や、その経験という自明性が、ぐらりと揺らぐ。それが、この作品の面白さのひとつだと思います。ただ、二次審査でゴーグルを被せられて、そのような頭での理

解は、この作品のほんの一部でしかなかったことに気づかされるのでした。

どういふことか。この提案で作者は、箱を自転車の荷台に載せて、街を走り回ります。説明によると、道を選び、風景を採集しながら走ることが、インテリア空間のデザイン行為となる、とある。けれども、こちらの感覚はもっと、エモーショナルなものでした。猛烈に「エモい」んです。書くのは少し恥ずかしいのですが、具体的に言うとそれは、お母さんが漕ぐ自転車の荷台の記憶、なのです。あるいはもう少し成長して、恋人との二人乗り、でもいいかもしれない。箱に空けられた2つのピンホールは、走行する自転車の両脇の風景を、横スクロール映像で室内に投影させます。すると、囲まれた4面の壁のうち2面には、映像の投影されない黒い影が生じる。そこに、ちゃんと背中を感じるのです。進行方向を背中に塞がれて、両脇を風景が流れていく時間。つまりこの作品は、私たちの遠い記憶をインテリアデザインに変換する設計手法の提案だったのでした。

超空想住宅と聞いて、「実空間とVR空間のシームレスな連続性」といったテーマを設定した提案は、つまらない紋切型しか生まないに違いない、と当初考えていました。金賞案は、言い方によってはその紋切型に、ストレートに納まるものです。けれどもこの作品の重心は、そこにはありませんでした。それは言うならば、記憶の構成原理を分析し、それを再編集して構造化するプロセスの提示、とでも表現できるかもしれません。家やその集積としての都市は、いつか、誰かの記憶たちの総体である。作者の意図がそこにあったのか、はっきりとは確かめてはいませんが、建築の本質をテーマの王道から探り当てたこの提案は、間違いなく今年の金賞に値するものだったと思います。



中山 英之
東京藝術大学准教授
中山英之建築設計事務所

「風景を採取する自転車建築」金賞受賞者の声

●建築への問い

もし建築が動いたらどのような空間体験が可能か。建築は基本的に動かない。だから動いたら面白いだろう。単純な発想である。身近な動く物に、自転車がある。だから建築と自転車をくっつけてみた。単純である。だが、出来上がったものは複雑怪奇だった。人間と街が、自転車と建築と映像を介して繋がった。ここに実感の伴う建築の可能性を見出した。

●IAMAS

僕は大学の学部から事務所に勤務していた時はずっと、自分の設計する建築に実感をもてずにいた。スケッチ、図面、模型、シミュレーションによる説得材料を生成し、上手に理想を語る。実物が目の前にあるわけではないのに、魅力を饒舌に語る自分に胡散くささを感じていた。その後、日々抱いていた映像への問題意識から、情報科学芸術大学院大学(通称IAMAS)に入学した。IAMASで感じたのは、建築に対する風あたりの強さだ。教員の一人は、僕が語る理想の作品の形を、いらだちをもって聞いていた。ある日、教員に「シミュレーションじゃだめなんだよ」と叱咤された。シミュレーションをすることで分かった気になっていたのかもしれない僕は現実の体験を通してしか得られないものを求め、当時開催していた大地の芸術祭を目的地に自転車旅行に出かけることを決意した。岐阜県から新潟県へ日本海側を巡って行く、470kmのロングライドだった(完走はできなかった)。僕の自転車人生はそこから始まった。

●観測

ロングライドを経て、自転車に乗って走るとは観測行為に近いと気づいた。自らの感覚器官を外部にさらけ出しながら移動する行為は、対象との出会いにおける刺激が自動車や電車とは異なり直接的である。ライドにはあらゆる発見があり、僕に大きな影響を与えた。例

えば、ライド中に見かける草花が“草花”という言葉でしか観測できないことに危機感をもち、ロングライド後に野草を採取し始めた。視界に入り込むあらゆる植物を把握するため、野草ハンドブックを手にして大垣を巡り、草花を判別し、たまに食べる生活をおくるようになった。こうした一連の行為も、野草を身体を通して観測していると捉えることができるのではないか。“観測”という単語が頭から離れず、どんな時もそれが僕の考えを彩るようになった。

本作のタイトルは「風景を採取する自転車建築」である。キーワードは“自転車で走ること”=“空間のデザイン”で、操縦者が自転車を漕いで街を探索する行為により、360°カメラを内蔵した模型が周囲を観測し、結果として時間軸のある映像空間が生成される。身体が周囲の環境と摩擦しているリアリティが、即時的に空間をデザインしている。これはシミュレーションではない実感の伴う空間設計手法だ。模型内にはカメラオプスキュラを利用することで映像が映し出され、観測した映像をHMDを用いて空間として体験する。

●映像と物質について

僕がIAMASに入学した理由は、映像と建築の親和性を高める方法を模索するためだった。現代社会は作為的な映像が至る所を埋め尽くしており、人々はそれらと無縁に生活することは難しい。それが、人間、人間以外問わず、物質から乖離しているように感じられ、表現として勿体無く思えた。この感覚は、僕が建築をやってきたことに起因するものだと思う。映像つまり人工光と対置する自然光は、建築にとって重要で、常に物質と関わっている。表面の質感や素材感を引き立て、太陽の動きにもなつて影も動く。水面に映る光や木漏れ日は物質との相互作用から生まれる魅力の際は例である。だから、初めて自然光を用いたカメラオプスキュラを目にした時、「これだ!」と確信した。人間の認識可能なイメージを

RGBの点が模倣するのではなく、世界の摂理に基づいて作られる、正直な映像である。通常、HMDを使用して体験する空間というと、CGのような表現が連想されるかもしれないが、本作は極めて物質的である。人間と自転車とダンボール(模型)なのだから、材料を見るだけでもそうなのだが、物質的な印象を強調する一因として、自然光の延長として映像を扱っていることも確かだろう。

●宣言

本コンペで僕は新しい夢を見つけた。尊敬する方々からの言葉は僕にとって生きる糧になる。自転車建築は今後も続けていくので、様々な所で見かけることになるでしょう。まずは自転車建築で日本を一周するところから始めます。自転車建築という、一見、よく分からない活動をしている僕を応援してくれている家族、試行錯誤を続けていく中で様々な協力をしてくださるクリティカルサイクリングを主催している赤松先生、この場を借りて感謝を申し上げます。



読者の皆様へ。以下のQRコードからは自転車建築の制作過程を記録した記事にとびます。

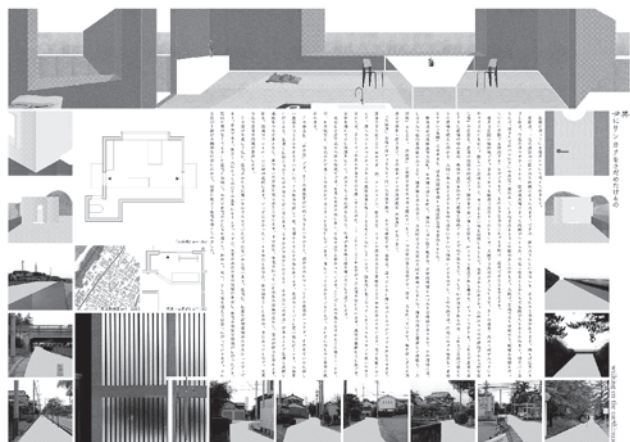


門田 健嗣
(情報科学芸術大学院大学)

⇒ 銀賞 ⇐ Silver prize

「世界にリンクをさだめたけもの」

安田 壮馬 (福井大学大学院安全社会基盤工学)



この提案は、「超空想住宅」とは?という問いに、真摯に向かい合い、詩的な解釈で答えていた。提案は、作者の母の家であり、母はいつも犬と一緒に散歩する。その過程の中で、空想住宅を見出し、設計したものは、玄関に置かれた「ラック」と、海岸線に建つ小屋のような「大浜庵」である。

この提案の肝は「ラック」にあった。ラックには、犬の散歩のためのリード、家の鍵、傘など日常のものが掛かっているだけだが、どれかに触れた時点で、玄関から先に、空想が拡がり、境界が生まれ、虚構の住宅が浮かび上がってくるという。確かに、ラックに掛かっているものに触れることで、スイッチが押され、次々に目の前にシーンが浮かび上がる感覚が想像できた。まさに、その人だけが生成した空想の世界が拡がっていくと言える。この解釈に多くの審査員が共感し、推しに繋がっていった。

一方、「大浜庵」については、海岸線を眺め

る開口部の心地よさは感じるものの、なぜ二つの出入口やミニキッチンがあり、様式トイレが設えられるのかといった、空想の世界に建つ現実の世界の深度のギャップが最後まで引っかかる点であった。

この空想ではなく、現実として建ち現れる建築としての提案への共感が足りなかったところが、金賞へ届かなかった点ではあるが、「超空想住宅」という難題に、ハッとした気づきを示してくれた空想力に最後まで惹かれ、一押し投票の段階でも一押しした。

空想力に長けた作者が、今後、実際にどのような空間を具現化していくのか、楽しみでならない。

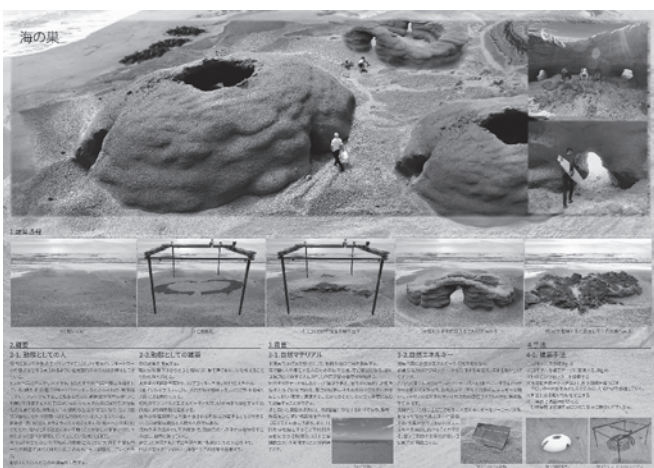


高本 雅好
福山女学園大学准教授

⇒ 銀賞 ⇐ Silver prize

「海の巣」

紀平 陸 (慶應義塾大学環境情報学部)



砂による造形と、その朽ちていくことと共に暮らすイメージが美しい作品である。そしてこの住宅は、XYプロッターと人の手が協働して刻一刻と積み上げることによって生み出される。こうして作られた空間はどこ一つとして同じではなく、そして完成した瞬間から崩壊に向け時間は一方向に流れて砂に戻り、一瞬と

して同じ瞬間はない。公開審査での質疑はコンセプトから工法に至るものまで多岐に及んだ。想定したライフスタイルと提示する空間との関係をつないでいる考え方をより丁寧に示すべきであるという指摘や、この場所で営まれる生活の質に対する意見、造形の根拠となる工法に対する質疑等々…そしてそれら質疑応答を通じて、砂を固める糊の試作実験など、この造形を生むために様々なレベルの試行錯誤を制作者が行ってきたことも判明した。

本提案は今日の動きのあるライフスタイルをおくる「動態としての」人が、「動態としての

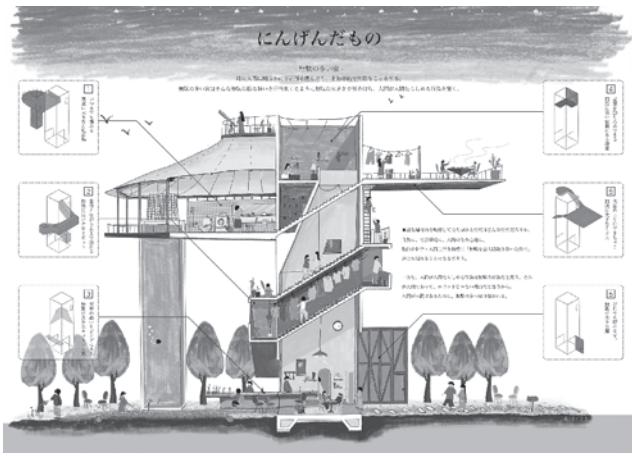
建築」を各自が身体性と機械技術によって個人的に構築することを、砂の造形による空間として示した。ここで示された視座は、様々な地域や材料での展開可能性をも示唆するものであるように思えた。この点は制作者本人の意図とは異なる様で、あくまでこの砂の造形であることが重要であるということであったが、この様に様々な質の想像を喚起してくれる点が興味深かった。今回、身体性が絡む提案が複数あり、それらが投げかける問いもまた多様であったが、その中でも本作は、提案そのものを作る風景の魅力に加え、その先の可能性について皆の想像力を刺激してくれる案であった。



亀井 暁子
静岡文化芸術大学教授/JIA会員

銅賞 Bronze prize

「にんげんだもの -無駄の多い家-」神谷 尚輝(名城大学大学院理工学研究科建築学専攻) 二



現代のAI等の最先端技術を使って導き出されるであろう最適解の住宅との比較として、人間が個々に持ち合わせる感覚を大切にす、時には「無駄」とも解釈のできる空間を展開するという案。

一般的なスケール感を逸脱することによって、新しい視点を生み出そうとする本作は、遊

び心のある前向きな楽しさを感じられる提案で、今後もう少し踏み込んだ提案を期待したい。一般的なスケールを超えて大きくすること以外でもっと「無駄」をつくり出すことはできないか。「無駄」と呼ぶものの本質は一体何なのか。それらが垣間見えるような提案だとさらに良かったのではないかと感じられた。スケール感を逸脱するのも手段のひとつではあるが、大きくしてみただけになってしまわない工夫ももう少し欲しいところ。また、2次審査時にはこの家に住む子供目線での空間の説明が主たるものだったが、もっと他の住まい手の目線にも立った時の解釈を考えてみるの

も「無駄」を検討する手段になるかもしれない。そしてその住まいとしての空間が一体どのような環境の中に建てられるのかでまた新しい解釈が生まれ、空間の可能性が広がるような気がしている。

確かに、現代において多く存在している住宅の中には、家事や育児、仕事、その他住まいの中で行う「作業」がなるべく時間短縮できるということを念頭に計画されているものが多いように感じる。時間短縮ということだけにフォーカスするのではなく、住むということに対する豊かさにフォーカスするという視点は大いに評価できる作品だが、手段としてもう少し掘り下げた提案ができるとより良い提案になるのではないかと感じた。



山口 千乃
CEN ARCHI

銅賞 Bronze prize

「名前のない空間で」向井 航希・加藤 哲也(名城大学工学部建築学科)



「朝ここで飲むコーヒーは最高」「トマト作り挑戦してみようかな。」本作のプレゼンテーションボードには、様々な声が漂う。AIにより各々の世界観が個別化するなか、地域に住ま

う人々をつなぎとめるのが、こうした活動を誘発し許容する「名前のない空間」だという。建築が大凡機能と名前を持つことも考えあわせると、興味深い提示だ。

だが、トマトを植えればそこは「畑」と名前が付かないか。あるいは「イチヨウの木を植えたい」に対し「落ち葉が大変で嫌」という世界観の異なる他者が会おうことが、この空間の役割ではないのか。2次審査の説明では、その展開がやや予定調和的で勿体なかった。

とはいえ、「名前のない空間」が住宅と住宅の間にアメーバの如く広がり「道路」という概念もなくしていく、という想像はラディカルさも含んで魅力的だ。

確かに、現代ではそう名付けられた途端「道路」は基本他の機能を持たず、車や人の通行に待機せざるを得ない。「名前のない空間」はだから、畑でも市場でも寝室でもあり、ときに道でもあるような、ひとつの機能や活

動に占拠されきらず刻々変わりうる空間、だろうか。

ところでGoogle MAPに、部外者が通って良いのか、と迷うような路地を案内されることがある。公道か否かでなく、通れると判断した最短ルートが表示されるのだろう。ならば刻々空間が変わろうとも、今通れるルートをAIが提示してくれるのは、即ち単一機能の「道路」が不要になるのは、意外とすぐかもしれない。そうしてできた「名前のない空間」の総体が、まち単位としての住宅となる、という「超空想」、私もしばらく併走させてもらいたい。

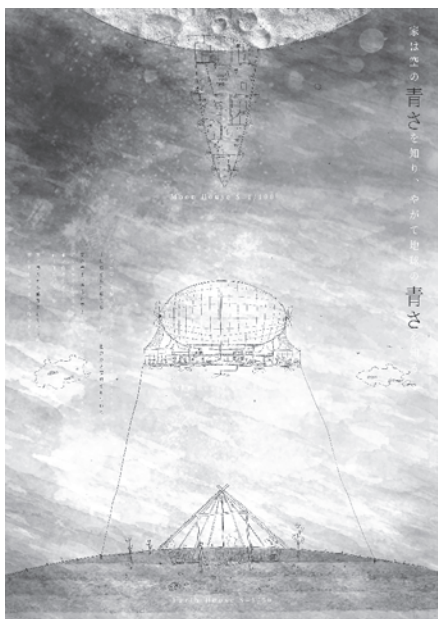


山岸 綾
中部大学准教授
サイクル・アーキテクト

⇒ 銅賞 ◀ Bronze prize

「家は空の青さを知り、やがて地球の青さを知る」

横井 悠介 (名城大学大学院理工学研究科建築学専攻)



宇宙を目指すことは、地球を隅々まで食い尽くした資本主義が、限界を気づかれないように「未来」を描いているようで好きではない

のだが、この作品には目が止まってしまった。建築家はドローイングという手法によって、言葉では伝えにくい感情やイメージのように柔らかいものたちを形にしていく。この作者は家に人格を与えて、重力のグラデーションと共に進化していく様を描きたかったと私は考える。「地上から空中へ、そして月へ」この作品には長い時間が込められている点を評価したい。時間とは「今という瞬間」が無限に小さい点となって非連続につながっている。その瞬間の中に、「記憶」と「願望」があることに気づく。と黒川雅之氏は言う。「記憶」とは『父母や故郷』であり「願望」とは『未来』である。(野生の衝動—東アジアの美意識—) 人格を与えられた住宅は人類と共にどのような「記憶」と「願望」を持つのだろうか？

腰原幹雄氏は寺社建築の棟梁たちによるゆっくりとした進歩・変革と比較して、現代建

築における建築家の諦めが早すぎると言った。それは構造へのこだわりに始まり、ポストモダンやオルタナティブモダンなど近代の次への模索にまで及ぶのであろう。結論を急ぐ必要はなく、もっと「しづとく、ねばるべき」だと。ゲスト審査員の中山英之氏の講演は以前大学でお聞きした内容であったが非常に新鮮に感じた。(記憶力が悪いだけかもしれないが) お話にしる、書籍にしる、興味のある「瞬間」には何度でも響いてくるからなのだろう。このドローイングは私には確実に響いたので。

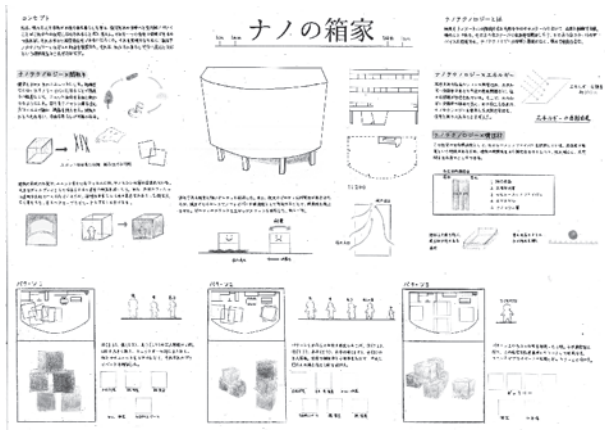
吉元 学

愛知淑徳大学
ワーク・キューブ/JIA会員



⇒ 中山 英之 ゲスト審査員特別賞 ◀ Special prize

「ナノの箱家」 杉山 莞太 (静岡県立科学技術高等学校)



を選びました。

私たちのからだは将来、パーソナルな超軽量モノコック構造体に包まれる。この案はそれを、箱舟ならぬ箱家と呼ぶのです。驚くことにこの箱家は、木造だといいます。まだ陸上に生命が存在しなかった原始地球。海中で波にそよぐことしか

式で思わず、そんなことを口走ったように記憶していますが、そこで出会った受賞者が高校1年生だと知って、本当に驚きました。

エアロゲル断絶層がラミネートされたこの快適な箱家を形成するシェルは、その表層そのものが発電、蓄電ユニットでもあり、同時にナノマシン層が情報を表示し、他者とのコミュニケーションや関係性の媒介者となる。その時、私たちが今日「家」と呼んでいる構造体は、それ以外の環境を含めて、この箱家にとっての地形のようなものとなるだろう。そんな予言の先にあるのは、ユートピアなのか、それとも、、、。応募シートを眺めながら、さまざまな妄想に捕らわれます。続きが気になって仕方ない物語のその先を切り拓くのは、きっと彼らの世代の「建築家」たちに違いありません。

自分語りで恐縮なのですが、中学生くらいの頃、父が購読していた科学雑誌を読むのが好きでした。もしもクルマがエンジンまるごとセラミックで作れたら、といった記事を読んでは、そんな乗物が走る将来を想像することがとても楽しかった。この応募案には、かつて感じたあのわくわくするような未来への純粋なまなざしを感じて、「ゲスト審査員賞は個人的に決めてよい」と聞いて迷わず「ナノの箱家」

できなかった植物が陸に上り、繊維質を固める高分子化合物を自ら生成することに成功した者がやがて重力に抗い、日光に向かって高く、大きく枝葉を広げることができた。その恩恵としての樹木を、精緻に加工することで架構へと置き換えたのが今日の私たちの家なのだとしたら、繊維質を再びナノスケールに分解再構築した素材によるモノコック構造、という提案は、この星の生命史の系譜に触れるものだ。授賞

中山 英之

東京藝術大学准教授
中山英之建築設計事務所



➤ 奨励賞 ◀

Incentive prize

「いきものぐらし」

山本 雄理 (金沢工業大学大学院) 安井 千尋 (金沢工業大学)



審査会場の様子: TOTOプレザールーム1・2 (TOTOテクニカルセンター内)



「審査を終えて」

ここ数年、縁あって東海エリアの建築イベントに幾度か参加させて頂いています。特に住宅建築賞では審査員の大役を仰せつかって、支部の皆様とエリアの広範囲を2日かけて巡ったことは、とても印象深い時間になりました。そこで知ったのは、特定の建築雑誌を中心とした論壇だけが日本の建築文化ではない、という本来ならば当たり前の、しかしそうでなければ触れることができなかったかもしれない、固有の建築風土の分厚い蓄積でした。個々の作品も去ることながら、ご一緒した運営の皆さんの、自らも多忙な作家でありながら、膨大な時間と労力を惜まず、このかけがえのない地域のネットワークを育て、継承する活動に情熱的に取り組まれる姿に、打たれました。JIA東海支部設計競技というこの場所も、そうした蓄積が育んできた建築風土がなければ存在し得ないことに、まずは最大限の敬意をお伝えたいと思います。皆さんとの真剣な議論や、そのあいまの対話がまずなによりも楽しかった。そのことを、この場を借りて受賞者や応募された皆さんに向けて、書き記しておきたいと思います。

今年のテーマは、おそらく審査員の誰ひとり「これが私の持論である」と自信を持って語ることが難しい、たいへん今日的なものでした。結果として、それぞれの捉え方によって評価が異なる、難しい審査となりました。そんな中にも傾向があったとするなら、私達がながしかの領域性を認識するとき、その輪郭線を建築が形づくること、あるいはその一部が建築と重なることへの、疑いを表明したもの、と言えたのではないかと。銀賞の「世界にリンクをさだめたけもの」や、銅賞の「名前のない空間で」などは、この傾向を代表するような提案だったように思います。そうしたテーマ設定自体へ、現代的な都市生活者におけるノマド性、といった先例を挙げたなら、けて新しいものではないかもしれない。けれどもそこには、かつて語られたような消費社会を軽やかに生き抜く遅さへの、羨望や称揚はありません。あるとしたらそれは、自身が所属する属性を外側から規定され、その証として振り分けられるアドレスから、自らの生を解き放ちたいという、内からにじみ出る渴望のようなものではないか。あるいはたつたひ

とつのパンデミックで、いとも簡単にめぬの殻になってしまう都市と建築を目撃してしまった、底が抜けてしまったような感覚、と言ってもいいかもしれません。プレゼンターの語り口は皆一様に穏やかで、優しい眼差しに満ちたものでした。けれども僕にはどうしても、その根底に流れる、言いしれない疼きのような気配を、感じずにはいられません。そしてその気配に、ソクソクするような創造の可能性を、見出さずにはいられません。

私たちの空想は、時に実体としての建築を越える。あるいは、建築は、空想によって実体を越える。テーマへの応答の総体から聴こえてきたそんな響きに、熱くさせられる審査の時間でした。

中山 英之

東京藝術大学准教授
中山英之建築設計事務所



「中山英之氏 記念講演会」

2次公開審査・表彰式に引き続き、ゲスト審査委員を務めていただいた中山英之氏の記念講演会が行われました。

中山氏の講演は、初めに「大きい」とはどういうことだろうか?という問いから始まり、ご自身の著書「1/100000000」にも出てくるスケール(縮尺)のことや、空間の輪郭のことなど、概念を見直すようなお話が最初にあり、後半はそれらの概念がかたちとなったような実作や模型のお話をうかがうことができました。

実作では主に2つの作品を詳しくお聞かせくださいました。1つ目はベルギーのアーティストインレジデンスの増築計画。パリの友人設計事務所とチームを組みコンペで勝ち取ったもので、円柱と円錐を組み合わせたボリュームにケーキをカットするように切り込みを入れると、その断面に切妻の家型があらわれ、周囲の民家や納屋と調和す

るというもの。形の生まれ方(仕組み)さえ共有していれば、その他の細かい部分の判断は現地にゆだねるという手法をとったとのこと。

2つ目は小豆島の公共トイレ。小豆島は古くから採石が盛んな島で、島には削られてきたという歴史があります。そんな島の玄関口にあたるフェリーのりばにトイレを計画。再び島の石をつかうことで、新たな島の輪郭をつくることを試みたもの。

そして最後に、1次・2次審査を受けて急遽スライドに加えてくださった、学生時代につくった開口が移動する住宅(模型)のお話。開口部が可動して、入口になったり、天窗になったりする案で、アイデアスケッチで終わるのではなく、構造体から外皮膜の素材、開口部の可動システムまで検討し、縮小版をモックアップで作り上げたもの。

今回の設計競技のテーマは「超空想住宅へ」ということもあり、自由に空想を膨らませた良案も

多くありましたが、中山氏は1次審査のときから、サイエンスのないフィクションはダメ。建築はファクトを扱うべき。と力を込めておっしゃっていました。最後に見せていただいた学生時代の模型は、かたちにするごとの大切さを実例を通して、学生さんに伝えてくださったのではないのでしょうか。

思考や概念から実作へと流れるように進んだ講演は、終始、学生さんへのエールだったように思えます。聴講された学生さんには大変貴重な場になったのではないのでしょうか。

1次・2次、記念講演と中山氏には貴重なお時間を割いていただき心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

高瀬 元秀

タカセモトヒデ建築設計/JIA三重



アメリカ広葉樹建築家懇談会in静岡

●開催日:2023年11月30日/12:00~15:00 ●会場:ホテルアソシア静岡

アメリカ広葉樹輸出協会 (AMERICAN HARDWOOD EXPORT COUNCIL) 以下AHECが主催してJIA静岡の石橋会長以下7名のメンバーと家具作家、ほか主に県内の関係木材流通業者、建材、製材メーカー、加工業者6名が招かれ、昼食後意見交換会が開かれた。

AHECはアメリカの国の大阪領事館内に組織されていて、領事館からもオブザーバーとしてアレックス農産物貿易事務所長ほか1名も参加されて、協会の代表者で今回の進行役の辻氏と書記も含め17名の参加者となった。

すでにJIAでは北海道、沖縄、関東甲信越、北陸で同様の催しが開かれたということで、国をあげてのアメリカ産広葉樹の流通、販売促進の力の入れようがわかれた。

始めに協会代表者 辻氏から15分間「アメリカ広葉樹とその環境」と題しpowerpointで概略説明があった。私は予備知識もなく参加したが、後に調べたら国内で流通する広葉樹(建材、家具材で熱帯材除く)の約50%がアメリカからの輸入であることを知った。

●アメリカでは針葉樹が西海岸、広葉樹は東海岸が主たる産地であり、個人所有林が80%を占めること

●伐採から製材、乾燥して製品に至る品質の管理のレベルの高さ(特に乾燥は6%まで行うこと)

●森林はAMERICAN HARDWOOD ENVIRONMENT PROFILE (AHEP) 等で環境管理されていること

●CO2 1tを 木材1㎡、コンクリート1㎡が封じ込め可能で温暖化対策に貢献できること

●輸入材の種類ではレッドオークが1番多い

等のレクチャーを受けた。



その後1.5時間あまり以下のテーマで意見交換会へ続いた。

- ① 静岡の建築家の環境、建築への取組
- ② 静岡の建築家の木質内装材利用に対する考え方
- ③ 無垢内装材の加工・施工方法
- ④ 建築家に対するアメリカ広葉樹を含む木材製品の情報提供と供給方法

我々一人一人が各々のテーマで指名を受けながら意見を言い、協会がこれに答える進行で自分自身まともな意見が言えたかわからないが、JIAメンバーからは国産材利用推進との兼ね合い、設計の中での広葉樹の使い方、樹種の部位による使い分け、国産材との比較、加工方法、内容についての意見、質疑などが出された。

自分のこれまでの仕事を振り返れば樹種の選定において、何気なくタモとかナラとか堅木とか図面に記入していたことが、今更だが材料の選定にはもっと深い知識を得て慎重にすべきだったと、この年でまたまた改めて反省することとなってしまった。

かつてアメリカ東海岸ノースカロライナ方面を旅行した時の景色、またペンシルベニアのピッツバーグ郊外のライトの落水荘を見学した折の周辺の雑木林など、日本の広葉樹林の雰囲気似ていたことなどを思い出していると、気が付けばもう終わりの時間は迫っていた。

辻氏からは今後ともAHECの趣旨に沿う内容で講演会、見学会などJIAに協力したい申し入れもあり、石橋会長のまとめのことで閉会となった。

清 峰芳 (JIA静岡)

清 建築設計事務所



三重短期大学出前授業 ●開催日:2023年 10月11日・11月15日

JIA三重では、県内の教育支援の一つとして三重短期大学への出張授業を毎年行っております。今年度は2023年10月11日(水)と11月15日(水)の2日間、生活科学科居住環境コース1年生31名を対象に課題Ⅰ「小空間の設計」の授業に参加致しました。



4.5mの立方体の空間を各自の一人暮らし用住まいとして設計する課題で、限られた空間内で必要な設備を備えた独自の間取りを計画します。昨年までは課題Ⅱ「住宅の設計」を対象に出張授業を行ってきましたが、今年度は前段階である課題Ⅰで基本になる部分を少しでも理解して頂き課題Ⅱをより良い形で完成させる事が出来るのではと考えて変更してみる事になりました。

JIA三重からは10月11日エスキスのチェックに5名が参加し各自6名程度の学生のエスキスをチェックしてアドバイスをを行いました。半数以上の学生が建築を学ぶのが初めてであり設計がほとんど解らない状態でのエスキスですが、そこが良い面なのか構造などを重視しない独自性のある

エスキスプランが多く学生が楽しみながらプランニングされている事を感じました。

11月15日完成作品の講評には3名が参加し学生各自の完成品を見させて頂き選ばれた数名の学生が全体へプレゼンを行いました。短大生は2年間で建築の基本を勉強し社会で働く学生も多い事から一つの課題は重要であり建築の仕事に興味を持って頂く良い機会になればと思う事から、今後も続けていく事業であると考えています。

相原 宏康 (JIA三重)

Hiro*設計室



三重建築学生合同課題発表会2023 ●開催日:2023年 12月9日

2023年12月9日(土曜日)三重大学のレーモンドホールでJIA三重主催の「三重建築学生合同課題発表会2023」が開催された。この企画は三重で建築を学ぶ学生がそれぞれの学校で出題された課題の成果品を参加者(一般学生および教授方)の前で発表し、建築家の講評を受けることで建築への意識や価値観を高め、建築に取り組む姿勢を学ぶ事を趣旨として2021年から毎年開催されている。今回も三重大学(2年生)、三重短期大学(2年生)近畿大学工業高等専門学校(5年生)の三校からそれぞれ代表者3名(残念ながら三重短は1名病欠)が力作を携え発表会に参加した。講評者はJIA三重の会員2名に加え、ゲストクリティックとして建築家の三谷裕樹氏に御参加いただいた。またJIA三重の研修会講師として前日から三重県入りされていた株式会社建築再構企画代表の佐久間悠氏に飛び入り参加していただき、豪華な顔ぶれの講評陣となった。



初めに三重大学の課題「公園に隣接するオープンキッチン・ハウス(独立住宅)」の発表、その後三重短大の「コミュニティセンター」近代高専の「泊まれる博物館～江戸川乱歩記念館～(公共施設)」と続いて学生が作品内容を説明。会場参加の学生も他校の学生の作品発表に真剣な面持ちで聞き入っていた。

講評では実務者ならではの厳しい指摘もありながら、「去年より作品の内容がレベルアップしている。」など温かい言葉が学生達にかけられた。全体講評では三谷氏から



「プレゼンの仕方を工夫するとより作品の内容が伝わるのではないかと。自分の学校にこもっていると分からない事もある、この会に参加し他の学生のプレゼンを見られる事はとても有意義。」と建築学生への激励の言葉が伝えられた。

山本 覚康 (JIA三重)

山本一級建築士事務所



2024年度 東海支部役員選挙についての報告

2023年11月24日
東海支部選挙管理委員会委員長 鈴木 慶智

2024年度東海支部役員選挙について、11月17日に立候補を締め切り、11月17日に第2回選挙管理委員会を開催しました。立候補者は支部役員等選出規則に定める定数と同数であり、立候補届出書の記載も適正かつ被選挙人の資格を有することが確認されましたので、立候補者を当選人として確認しました。ここにご報告申し上げます。

当選人は下記の通りです。

【幹事】

●静岡地域会

石橋 剛 ((同)石橋剛設計事務所) ○

大橋 康孝 ((株)高橋茂弥建築設計事務所) ○

●愛知地域会

近藤 万記子 (ホームデコール設計事務所(同)) ○

高木 耕一 ((株)東畑建築事務所) ○

西村 和哉 (h+de-sign/architect)

野々川 光昭 ((株)オウ環境設計事務所) ○

間瀬 高歩 ((株)地域計画建築研究所)

●岐阜地域会

内田 実成 (内田建築設計事務所) ○

山田 浩史 (ヒロプランニング) ○

●三重地域会

出口 基樹 (日新設計(株)) ○

久安 典之 (久安典之建築研究所)

【監査】

中村 久 ((株)中村建築設計事務所)

水野 豊秋 ((株)ヤスウラ設計)

注：敬称略、○印は再任

2024年度 東海支部愛知地域会役員選挙についての報告

2023年11月15日
愛知地域会選挙管理委員会委員長 生津 康広

2024年度東海支部愛知地域会役員選挙について、11月13日に立候補を締め切り、11月15日に第2回選挙管理委員会を開催しました。立候補者は会長・副会長候補(支部幹事兼任)5名と、監査2名の定数と同数であり、立候補届け出書の記載も適正かつ被選挙人の資格を有することが確認されましたので、立候補者を当選人として確認しました。ここにご報告申し上げます。

当選人は下記の通りです。

【地域会長・副地域会長候補】(支部幹事兼任)

近藤 万記子 (ホームデコール設計事務所(同)) ○

高木 耕一 ((株)東畑建築事務所) ○

西村 和哉 (h+de-sign/architect)

野々川 光昭 ((株)オウ環境設計事務所) ○

間瀬 高歩 ((株)地域計画建築研究所)

【地域会監査】

水野 豊秋 ((株)ヤスウラ 設計) ○

吉元 学 ((株)ワーク○キューブ)

注：敬称略、○印は再任

豊田市足助町落部地区から公共交通機関はないが、国道420号線を作手方向に15km程進むと阿蔵町の30戸程の集落がある。程よく纏まりの良い集落で420号線沿いに並んでいる。標高650mにあり青森県のような気候と言われており、地域一体日当たり良好である。山林の手入れも行き届いている。三河山間部において林業が盛んであった事を語っている。

訪問したお宅は集落の北側山手のやや高台にある。屋敷配置は東西に、西から蔵、主屋、馬屋と連なっている。日当たり良く暮らしやすい状態となっている。主屋は明治20年頃と伝わり、馬屋は戦後の建築である。それは戦後も林業は栄えていたことと推測される。主屋は平入で入母屋の鍔葺き形式で立派である。現在の上屋根は棧瓦葺きだがかつては殺ぎ葺き屋根で



あったと伝わる。下屋根はトタン葺きとなっている。蔵は妻入り2階建て切妻、棧瓦葺きの置き屋根である。

ご婦人一人住まいだが、集落は近所付き合いが好ましくこの田舎暮らしに満足ですとここに暮らしていきたいと語っている。この鍔葺きの2段屋根の家屋が数多く見受けられること、蔵の屋根形式が置き屋根、漆喰塗りで数多くあることがこの集落の建物の特徴である。

町内にある神社には歌舞伎堂も備わり、山の信仰と伝統や暮らしぶりが表れており、山間部の人々が寄り添って協力しあって暮らし、家屋の様子が整った山間部集落が残されているのは全国的にも貴重である。



鍔葺きの住宅T家



高台の鍔葺きの住宅O家



家屋と土蔵の並び



O家の蔵



鈴木 祥司 (JIA 愛知)
アトリエ祥建築設計

編集後記

●第39回東海支部設計競技のテーマ「超空想住宅へ」は現実と実務に埋没する私の日常では感性

と想像力が刺激されるテーマです、審査員各位の悩ましくも楽しい評論を興味深く拝読させていただきました。金賞受賞の門田さんは自転車での日本一周を実行されるようなので今後の自転車建築学確立に期待いたします。次回40回を迎える当設計競技は毎回刺激的なテーマで私の学生時代「死者の家」の設計課題で悩んだ事が思い出されましたが学校のカリキュラムもエンジニアリングから想像思考力重視へシフトされている現状傾向は大変喜ばしいと感じるところです。

2024年は元旦から震災に航空機事故、波乱の年頭となってしまいました。能登の瓦葺家屋倒壊や地形変動は悲しく痛々しい、一

日も早い復興と被災された方々に日常が戻る事を祈ると共に、突然やってくる巨大東南海地震への備えの大切さを改めて実感した次第です。(伊藤 彰彦)

●支部コンペ、三重での授業協力、課題発表会など学生と会員が直接接する事業を掲載しています。コロナ対応が落ち着き、人が集まって議論する場が戻ってきました。リモートでは伝わりにくかった真意も感じられ、特に学生には建築の厳しい面・楽しい面を実感するものだったのではないのでしょうか。SNS利用の広がりによりコロナ禍が加わり、画像による建築の評価が著しく広まったと思えます。建築は五感で感じるものということを変更して広め行くことが大切と強く思います。先ずは人と人が実際に会うことからでも始まっていけば、そこに繋がっていくのではないのでしょうか。このアーキテクトの編集会議もリモート参加ができるようになり、事務局に集うのは3名ほどという会議が続いています。

各委員、必要な報告や意見は聞けて会議はスムーズですが、なにか物足りなさを感じます。思い付きや余談を盛り込めるよう多くの方の現地参加を期待しています。(服部 昌也)

ARCHITECT

第425号

発行日 2024.2.1 (毎月1回発行)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564) 21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail: shibu@jia-tokai.org

http://www.jia-tokai.org/

第55回 中部建築賞の入賞・入選・特別賞作品決定

中部9県の建築関係団体で構成する中部建築賞協議会は、「第55回中部建築賞」の受賞作品を発表した。今回は、応募数一般部門A24点、一般部門B32点、住宅部門33点の計89点の応募作品の中から下記の17作品が受賞した。

表彰作品の概要は次のとおり

①所在地 ②規模 ③建築主 ④設計者 ⑤施工者 (敬称略)

一般部門A (入賞)



岐阜市立長良小学校および長良公民館
 ①岐阜県岐阜市 ②鉄筋コンクリート造一部鉄骨造 地上2階 9,544.84㎡
 ③岐阜市 ④大建・大建met設計共同体 ⑤市川・福屋・土本特定建設工事共同企業体

一般部門A (入賞)



静岡理工科大学土木工学科棟 あーすつりー
 ①静岡県静岡市 ②鉄筋コンクリート造一部鉄骨造 地上4階 3,782.62㎡
 ③学校法人静岡理工科大学 ④栗生明・北川・上田総合計画 小石川建築ノ小石川土木 ⑤鈴与建設



石川県立図書館
 ①石川県金沢市 ②鉄骨造鉄骨鉄筋コンクリート造コンクリート充填鋼管構造、免震構造 地上4階地下1階塔屋1階 22,720.81 ③石川県 ④環境デザイン研究所 ⑤清水・豊蔵・表・寺井・双建特定建設工事共同企業体 トークン・ムラジ建設特定建設工事共同企業体 同・長坂特定建設工事共同企業体 橋・兆建特定建設工事共同企業体 和泉・大日土建特定建設工事共同企業体

一般部門A (入選)



中村区役所等複合庁舎
 ①愛知県名古屋市 ②鉄筋コンクリート造(免震) 地上5階地下1階塔屋1階 17,678.84㎡ ③名古屋市 ④竹中工務店 ⑤竹中工務店



伊勢市立桜浜中学校
 ①三重県伊勢市 ②鉄筋コンクリート造鉄骨鉄筋コンクリート造鉄骨造 地上3階 11,079.75㎡ ③伊勢市 ④日建設計・東伸周ARC設計特定設計業務共同企業体 ⑤船谷・伊藤・富士特定建設工事共同企業体 吉川・宮本特定建設工事共同企業体

一般部門A (入選)



福岡県立一乗朝倉氏遺跡博物館
 ①福岡県福岡市 ②鉄筋コンクリート造鉄骨造混構造 地上2階地下1階 5,281.75㎡ ③福岡県 ④内藤廣・センガ・設計共同体 金箱構造設計事務所 森村設計 ⑤見谷組・永和住宅・石田建設工業特定建設工事共同企業体

一般部門B (入賞)



建築設計事務所が運営する小さな複合施設 [h+BASE]
 ①福岡県福岡市 ②木造 地上2階 360.75㎡ ③hplus ④h+ARCHITECTS ⑤深谷

一般部門B (入選)



名古屋大学オクマ工作機械工学館
 ①愛知県名古屋市 ②鉄骨造鉄筋コンクリート造 地上2階 地下1階 1,485.61㎡ ③国立大学法人東海国立大学機構 ④国立大学法人東海国立大学機構施設統括部 諸江一紀建築設計事務所 D.L.G Architects 佐々木勝敏建築設計事務所 名古屋大学工学部施設整備推進室 東畑建築事務所名古屋オフィス ⑤松井建設名古屋支店



OYAKI FARM BY IROHADO
 ①長野県長野市 ②木造在来工法 地上2階 1,733.64㎡ ③いろは堂 ④遠野未来建築事務所 ⑤寺島工務店

住宅部門(入賞)



赤松の平屋
 ①愛知県安城市 ②木造 地上1階 130.73㎡ ④岩間建築設計事務所・西口賢建築設計事務所 ⑤丸中建設



空蟬の家
 ①静岡県浜松市 ②鉄筋コンクリート造 地上1階 111.79㎡ ④KARMAN STUDIO ⑤エヌテックサービス

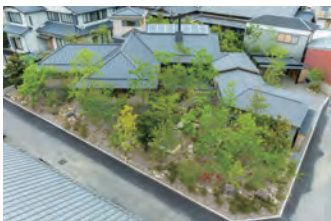


山手の家
 ①静岡県浜松市 ②木造 地上2階 205.69㎡ ④後藤周平建築設計事務所 一級建築士事務所 ⑤鈴木建設



福井の住宅
 ①福井県福井市 ②木造一部鉄筋コンクリート造 地上2階地下1階 171.23㎡ ③水上智也建築設計事務所一級建築士事務所 ⑤水上建設

住宅部門(入選)



廻庭の樓家
 ①愛知県岡崎市 ②木造 地上2階 256.52㎡ ④TSCアーキテツク ⑤戸田工務店



射和の家
 ①三重県松阪市 ②木造 地上1階 98.33㎡ ④原田建築設計舎 ⑤原田建築設計舎



軽沢沢の居場所
 ①長野県北佐久郡 ②木造在来軸組工法 地上2階 194.35㎡ ④一級建築士事務所遠藤隆洋建築設計事務所 ⑤青木屋

住宅部門B (特別賞)



金石町家つなぎプロジェクト
 ①石川県金沢市 ②木造 地上2階 105.15㎡ ③北村陽子けんちくアトリエ ⑤夢工場